

(最終講義)

浄土教思想の特徴

——人間觀を手がかりとして——

藤 堂 恭 俊

浄土教思想は、仏と凡夫およびその兩者のかかわりの上に成立する。そうした浄土教の仏教としての特徴を、思想的視野に立って把えてみたい。わずか六十分という時間的制限があるので、片手落ちとなることを承知の上で、曇鸞の浄土教思想に中心を置きながら、人間觀を手がかりとして考えてみたいと思う。

一、人間の性のまま——煩惱・横超・速得——

人間は生まれながらにして結使・煩惱を、人間の性として一律平等に具有している。しかるに仏道の実践に於て煩惱は、否定されるのが基本である。浄土教の実践において煩惱はいかにとり扱われていたであろうか。

- (1) 有_レ凡夫人煩惱成就_二亦得_レ生_三彼浄土_二三界繫業畢竟不_レ牽。是不_レ断_三煩惱_二得_三涅槃分_一。焉可_三思議_一。〔『往生論註』卷下〕

- (2) 彼清浄仏土有_三阿弥陀如来無上宝珠_一。以_三無量莊嚴功德成就帛_二裹投_下之於所_三往生_二者心水_上。豈不_レ能_下転_三生見_一。

為無生智乎。(『往生論註』卷下)

- (3) 彼下品人雖不知法性無生 但以稱仏名力作往生意願生淨土 彼土是無生界見生之火自然而滅。
 (『往生論註』卷下)

- (4) 若得往生弥陀淨國娑婆五道一時頓捨 故名「横截」。(『安樂集』卷下)

- (5) 若論衆生垢障實難欣趣 正由託仏願以作強緣致使五乘齊入。(『觀經疏』序分義)

- (6) 往生淨土之法門雖未斷煩惱之迷 依弥陀願力生極樂者永離三界出六道生死。(中略) 天台真言皆
 雖名頓教斷惑故猶是漸教也。未斷惑出過三界之長迷故以此教為頓中之頓。(『無量壽經釈』)

左記の(1)から(6)にいたる曇鸞、道綽、善導、法然四祖師の釈文をみると「繫業」、「生見」、「不知法性無生」、「五道」、「垢障」、「未斷惑」というように、表現に相異するところがあるが、みな人間の性さがとしての煩惱を願往生という仏道の上に許容し、あえて否定することを示していないことに気づかされる。そのことは決して煩惱の単なる肯定、拡充を意味しない。そのことを具体的に(1)においては「淨土に生ずること得れば繫業をひかず」と言い、(3)においては「見生の火自然に滅す」、(4)においては「五道一時に頓捨す」と言い、また(2)においては「生の見を転じて無生の智となす」、(5)においては「五乘齊入」、(6)では「未斷惑と雖も極樂に生ず」と指摘している。ともかく内容に多少の相異があっても、たとえ煩惱を否定しないが、煩惱が煩惱としてのはたらきをしないことは、釈文に共通的である。

このように煩惱をして煩惱のはたらきをなさしめないのは、(1)、(3)、(4)の場合は淨土の土徳・土用であり、(2)の場合には名号であり、(5)と(6)の場合は念仏する者に対してはたらく阿弥陀仏の願力であると指摘している。このような淨土教の特徴を(4)においては「横截」と名づけ、(6)においては「頓中之頓」として捉えている。この「横」は「豎」に

対し、「頓」は「漸」に対する対概念である。この「横截」、「頓中之頓」として把えられる浄土教の特徴について、竜樹、天親、曇鸞の三師は、

(7) 有_レ以_レ信方便_二易行疾至_三阿惟越致_二者_一。(『十住毘婆沙論』卷第五易行品)

(8) 如_レ是修_二五念門行_一自利利他速得_レ成就阿耨多羅三藐三菩提。(『往生論』長行)

(9) 言_二速得_三阿耨多羅三藐三菩提_一是得_二早作仏_一也。(『往生論註』卷下)

というように、「疾く」、「速得」、「早作仏」と指摘している。これによると、仏道を成就する菩薩が修道の階位を昇進するようなことなくして、「阿惟越致」や「阿耨多羅三藐三菩提」、「作仏」を成就するから「すみやか」と内容づけられる。その具体的内容について天親菩薩は

(10) 見_二彼仏_一未証淨心菩薩畢竟_レ証_二平等法身_一与_二淨心菩薩_一与_二上地諸菩薩_一畢竟同得_二寂滅平等_一。(『往生論』長行)

と、「常倫諸地の行を超出する」ことを指摘しているが、これを受けた曇鸞大師は『無量寿経』卷上に説く、法蔵菩薩の第二十二必至補処の願を踏えて、

(11) 案_二此(無量寿)経_一推_二彼国菩薩_一或可_レ不_レ從_二一地_一至_二一地_一言_二十地階次_一者是釈迦如来於_二閻浮提_一一応化道耳。

他方淨土何必如_レ此。五種不思議中仏法最不可思議。若言_二菩薩必從_二一地_一至_二一地_一無_レ超越之理_一未_レ敢詳_一也。というように、あきらかに「超越之理」をもって浄土教の特徴であることを強調している。

二、因果応報と信仏の因縁——難行自力と易行他力——

次に(1)(2)(3)について、さらに掘りさげて考えを進めたいと思う。人は過去を背負い、未来を孕みながら現在を生きている。その核をなすのが業である。(1)に示される「三界の繫業」の最たる者である下品下生人を取りあげるならば、因果関係の上から当然墮地獄必定の造罪者である。この下下人に対して、『観無量寿経』下品下生段に示される

(12) 下品下生者 或有_二衆生_二作_二不善業_二五逆十惡_二具_二諸不善_二。如此愚人_一以_二惡業_二故_一墮_下墮_二惡道_二經_二歷多劫_二受_レ苦

無_レ窮。如_レ此愚人_一臨_レ命終時_二遇_下善知識種種安慰_二為_レ說_二妙法_二教令_レ念_レ仏。此人苦逼不_レ違_二念_レ仏_一。善友告言_レ汝若不_レ能_レ念者_一應_レ稱_二無量壽_一。如_レ是至心_レ令_レ不_レ絶_レ具_二足十念_二稱_二南無阿彌陀_一。稱_二仏名_二故_一於_二念念中_二除_二八十億劫_一生死之罪。命終之時見_下金蓮華猶如_二日輪_二住_レ其人前。如_二一念頃_二即得_レ往_二生極樂世界_一。(『観無量寿経』)

と説かれているように、「令声不絶具足十念称南無阿弥陀仏」させることによって因果応報を越えさせしめ、繫業から解放して浄土の人たらしめる。このことは最低の人間を視野のなかに入れてのことであり、曇鸞大師が

(13) 易行道者謂但以_二信仏因縁_二願_レ生_二淨土_二乘_二仏願力_二便得_レ往_二生彼清淨土_一。仏力住持即入_二大乘正定之聚_一。(『往

生論註』卷上)

と指摘しているように、「信仏の因縁」をもって因果応報の絆を打ち破ったことを物語っている。さらに「三在義」をみるに

(14) 云何在_レ心。彼造罪人自依_二止虛妄顛倒見_一生。此十念者依_二善知識方便安慰_二聞_二実相法_一生。一実一虚 豈得_二相_一比。

云何在縁。彼造罪人自依_二止妄想心_一依_二煩惱虛妄果報衆生_一。此十念者依_二止無上信心_一依_二阿彌陀如来方便莊嚴眞実清淨無量功德名号_一生。(『往生論註』卷上)

というように、人間の営みを「虚妄顛倒の見」に基づき、「煩惱虚妄の果報の衆生」を相手にして、造悪をかざねると指摘すると共に、それを越える方法を示している点において注目し値する。

また(2)に示される往生を願う「生の見」の「見」は、竜樹菩薩が『中論』において八不として否定している「見」である。この「見」を具体的に八不として示した竜樹菩薩は(7)において、「信方便をもって易行にして疾く阿惟越致に至る者あり」と説く易行に対する難行として「阿惟越致相品」に、

(15) 漸漸精進後得_二阿惟越致_一者。今可_二解説_一。答曰。菩薩不_レ得_二我_一 亦不_レ得_二衆生_一 不_二分別説_一法 亦不_レ得_二善提_一 不_二以_レ相見_二仏_一 以_二此五功德_一 得_レ名_二大菩薩_一 成_二阿惟越致_一。(『十住毘婆沙論』卷第四)

と示している。この漸漸精進の菩薩が実践する人法二空の具体的実践としての「五功德」こそ難行であり、これに別異な仏道実践を易行であることを明示したと考えるべきである。この「信」を基調する易行について、竜樹菩薩は

(16) 阿彌陀仏本願如_レ是。若人念_レ我称_レ名自帰即入_二必定_一得_二阿耨多羅三藐三菩提_一。是故常応_二憶念_一。(『十住毘婆沙論』易行品)

といているように、「我」と「汝」という人格的關係の上に成立することを示しているが、注目し値する。つまり「信」は能取・所取の關係を離れてはなりたたない。

ともかく、「見」「分別」を性とする人間にとって、人法二空の具体的実践である「五功德」は、能取・所取の關係を仏道の実践上に認めないから「難行」であり、能取・所取の關係の上に認められる「信方便」に基づく実践は「易行」といわざるを得ない。このように竜樹仏教の上に見られる「難行」から「易行」への展開は、いったい何を

意図してのことであろうか。仏道はすべての人に対して、その門戸を開くべきであるという意図がはたらいてのことである。その内容を法然上人の言葉を借りて示すならば

(17) 若以_二智慧高才_一而為_三本願_一者愚鈍下智者定絶_二往生望_一。然智慧者少愚癡者甚多。〔選択集〕第三章私釈段〕
 というように、そのところは、仏道の実践をすべての人に対して平等になさしめるために「難」を捨てて「易」を開顯した、とみるべきである。仏道は人法二空の実践に堪え得るといった特定の人のためにはないことを示したのである。人間が生まれながらにして具えている性である能取・所取の関係を、仏道実践の上に認めたのが「信方便」に基づく「易行」であるから、法然上人のいうように「諸機に通」ずるか、否かこそ、難易を分判せしめる基準といわなければならない。

この点において「行」そのものの難易を示した竜樹菩薩の難易二行説を、曇鸞大師は時代、社会に対するするどい洞察に基づいて、

(18) 謹案竜樹菩薩十住毘婆沙云。菩薩求_二阿毘跋致_一有二_二種道_一。一者難行道二者易行道。難行道者謂於_二五濁之世_一於無仏時_一求_二阿毗跋致_一為_レ難。此難乃有_二多途_一。粗言_二五三_一以示_二義意_一。(中略) 五者唯是自力無_二他力持_一。〔往生論註〕卷上)

というように、現在を「五濁の世、無仏の時」と捉えたことは、仏道の実践が行われる場との関わりを持たせてのことであるから、その難易二道の説は行縁という新局面をひらくと共に、

(19) 引_レ例示_二自力他力相_一。如下人畏_二塗_一故受_二持禁戒_一。受_二持禁戒_一故能修_二禪定_一。以_二禪定_一故修_二習神通_一。以_二神通_一故能遊_二四天下_一。如是等名為_二自力_一。

又如_レ劣夫跨_レ驢不_レ上從_二転輪王行_一便乘_二虚空_一遊_二四天下_一無_レ所_中障礙。如是等名為_二他力_一。〔往生論註〕卷

下)

とあるように自他二力説を樹立し、戒定慧（神通を慧に含める）を「自力」とし、阿弥陀仏の四十八願のなか、とくに第十八念仏往生の願、第十一住正定聚の願、第二十二必至補処の願の三願を増上縁とすることを「他力」と規定するに至った。曇鸞はこのように易行道・他力を仏道実践の上に、難行道、自力と別異な仏道体系として特徴づけた。このことは、道綽にさきだつて時と機に相応する教えとしての浄土教を、中国社会の上に確立したことを意味する。

三、願心莊嚴の世界と二種法身——内証と外用——

浄土に往生した者に対して(1)に示されるごとく三界の繫業を牽かしめず、また(3)に示されるごとく見生の火を自然に滅せしめるはたらきを持つ浄土について曇鸞は、

(20) 仏本所_三以起_三此莊嚴清淨功德_二者 見_三三界_二是虚偽相是輪転相是无窟相 如_三𧀮𧀮循環_一如_三蠶繭自縛_一 哀哉衆生締_三此三界_二顛倒不淨。欲_下置_三衆生於不虛偽_二於不輪転_二於不無窟_二得_中畢竟安樂大清淨_也。是故起_三此清淨莊嚴功德_一。〔『往生論註』卷上〕

というように、三界にしばられ感業苦をかさねて顛倒不淨なる人間を哀れみ、感業苦のない畢竟安樂大清淨の処を得せしめる救いの場として把えている。このように浄土自身にそなえる救済のはたらきについて、具体的に事例をあげるならば、作願門積にみられる

(21) 一者一心専念_三阿弥陀如来_二願_三生_三彼土_一 此如来名号及彼国土名号能止_三一切惡_二。二者彼安樂土過_三三界道_一 若人亦生_三彼国_二自然止_三身口意惡_一。三者阿弥陀如来正覺住持力自然止_下求_三声聞辟支仏_二心_一。此三種止從_三如来如実功

徳一生。(『往生論註』卷下)

という三止を一例とすることができる。このようなはたらきを持つ浄土は

(2) 從_二菩薩智慧清淨業_一起莊嚴仏事 依_三法性_一入_二清淨相_一。是法不_三顛倒_一不_二虛偽_一名為_二眞実功德_一。云何不_三顛倒_一 依法性順_二諦_一故。云何不_三虛偽_一 攝_二衆生_一入_二畢竟淨_一故。(『往生論註』卷上)

と指摘しているように、法性によって二諦に順じ、しかも衆生を攝めとって畢竟淨に入らしめる仏の自内証に基づく外用を具えた世界である。

天親菩薩はこの阿弥陀仏の浄土を

(23) 彼無量寿仏国土莊嚴第一義諦妙境界相。(『往生論』長行)

と把え、また、その妙境界相を三種莊嚴功德成就相(国土莊嚴十七種、仏莊嚴八種、菩薩莊嚴四種。計二十九種相)と明示するとともに

(24) 向説觀察莊嚴仏土功德成就 莊嚴仏功德成就 莊嚴菩薩功德成就、此三種成就願心莊嚴。応_レ知略説_二入一法

句_一故。一法句者謂清淨句 清淨句者謂眞実智慧無為法身故。(『往生論』長行)

というように、それら三種莊嚴功德成就の相を「願心によりて莊嚴せられたり」と規定している。このことは

(25) 論曰。最清淨自在唯識為_レ相。積曰。菩薩及如來唯識智 無相無功用故言清淨 離_二一切障_一無退失故言_二自在_一。

此唯識智為_二淨土体_一故。不_下以_二苦諦_一為_レ体。此句明_二果円淨_一。(眞諦訳『攝大乘論』積 卷第十五積智差別勝相)と示されるかの十八問淨説における唯識智を体とする浄土と峻別さるべきである。所謂転識得智の境界と、一切の衆生を救済することを根本願望として建立された成就願心莊嚴の浄土との相異は、顯著であると言わねばならない。さらに天親菩薩は、三種莊嚴功德成就の相を一法句に収まることを指摘しているが、その一法句とは眞実智慧無為法身と

いう阿弥陀仏の自内証、いわゆる理智不二を指し、三種莊嚴功德成就の相はその外用として捉えていた事が知られる。曇鸞大師はこのように天親菩薩の浄土観を踏えながら、より一層具体的、積極的に阿弥陀仏の浄土の特徴を打ち出すことに努めている。すなわち

⑳ 出_レ有_レ而有_レ曰_レ微。出_レ有_レ者謂_出三有_一。而有_レ者謂_浄土有_レ也。(『往生論註』卷上)

と、「有を出て、而も有」と浄土を把えていることは、かの竜樹菩薩が

㉑ 若十方国土及諸仏 不_レ空者空_為有_レ偏。有_レ偏名_三有_空不_空處。今実不_レ偏故一切法一切法相空。(『大智度論』

卷第九十四)

と指摘した有空・不空という偏のない一切法相は空なりとして、積極的肯定的に有として表現したことを意味する。

つまり、㉒「心行処滅 言語道断」(『大智度論』卷第二)や、㉓「心行言語断」(『中論』卷第三觀法品)というように、行の範疇を借りることによって、積極的、肯定的に表現しなかった究極の世界を、「第一義諦妙境界相」というように三有を越えた有の世界として積極的に打ち出したのである。このことは、人をして浄土を欣慕し、願生の心をかりたてる上に大いに役立つわけである。なぜならば、もし浄土を冷暖知的に把えらるべき世界として把えるならば、人に浄土の実在と阿弥陀仏の救済の聖意を、如何にしても伝え得ないからである。

さらに曇鸞大師は

㉔ 觀_三彼浄土莊嚴功德成就 明_下彼浄土是阿弥陀如来清浄本願無生之生。非_如三有虚妄生。(『往生論註』卷下)

というように、莊嚴功德成就の相を、阿弥陀仏の清浄本願無生の生と把えている。いうところの清浄と言ひ、無生という表現は、阿弥陀仏の自内証とのかかわりにおいて理解さるべきである。また、いうところの本願とのかかわりについては

(31) 応_レ知_レ此三種莊嚴成就由_二本四十八願等清淨願心之所_一莊嚴。因淨故果淨。非_中無因他因有_上也。〔『往生論註』

卷下〕

と指摘しているように、法蔵菩薩が因位において、おこした四十八とおりの本願を成就した阿弥陀仏の境界である三種莊嚴功德成就の相は、もとすべての人を救済する願心を成就した世界であるから、当然、自内証に対して外用として把えらるべきである。この自内証としての「清淨」、「無生」と外用としての「莊嚴功德成就相」は、広略相入を示現すると把えられている。すなわち、

(32) 上国土莊嚴十七句 如來莊嚴八句 菩薩莊嚴四句為_レ広。入_一法句為_レ略。何故示_二現広略相入_一。諸仏菩薩有_二

種法身_一。一者法性法身 二者方便法身。由_二法性法身_一生_二方便法身_一。由_二方便法身_一出_二法性法身_一。此_二法身異而

不_レ可_レ分 一而不_レ可_レ同。是故広略相入統以_二法名_一。菩薩若不_レ知_二広略相入_一則不_レ能_二自利利他_一。〔『往生論註』

卷下〕

というのが、その文である。

このなか、曇鸞大師のいう広略相入の「略」とは、天親菩薩のいうところの入一法句を指し、これに対する三種莊嚴功德成就相を「広」と命名し、広略という対概念を用いることによって、一法句と三種莊嚴功德成就相との關係を明白ならしめたのである。すなわち曇鸞大師の二種法身説こそ、この兩者の關係をあきらかにした妙釈といつて過言ではない。略と規定される阿弥陀仏の理智冥合、つまり自内証としての法性法身が、人間の世界に向つて打ちたてた莊嚴功德成就相を方便法身と名づけ、その方便法身としての莊嚴功德成就の相は、願生者をその中に包みこみ、救い取り、法性法身という阿弥陀仏の自内証をさとらしめる働きをする。つまり阿弥陀仏は、内なる自内証の世界に閉じこもることなく、外に向つて救いのはたらきをなすと共に、その救いのはたらきは願生者をして、阿弥陀仏の自内証

をさとしめずにはおかないのである。したがって、この二種法身の説は、阿弥陀仏の衆生救済の成就願心によって支えられている、といつて過言ではあるまい。

四、念称・名号観・第十八願釈

願生する念仏者にはたらく阿弥陀仏の願力については、『往生論註』の開卷劈頭の(3)によると、第十八、十一の二願を暗示し、さらに巻末の「利行満足」において

(3) 凡是生_三彼淨土_二及彼菩薩人天所起諸行 皆緣_三阿弥陀如来本願力_一故。何以言_レ之。若非_三仏力_一四十八願便是徒設。(『往生論註』卷下)

と指摘し、第十八、十一、二十二の三願の願文を列举し、三願のそれぞれについて「仏願力に縁るが故に」十念念仏をもって、すなわち往生を得、正定聚に任ず、常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習すと指摘している。この本願力の主である阿弥陀仏の淨土もまた

(4) 安樂淨土は無生忍菩薩淨業所起。阿弥陀如来法王所領。阿弥陀如来為_三増上縁_一。(『往生論註』卷上)

というように、阿弥陀仏の増上縁のはたらく世界であると言いきっている。いうところの増上縁とは、(5) 「他力為_三増上縁_一」(『同上』)と指摘しているように他力と受けとることができると。つまり(4)に示される「信仏因縁」の縁は仏願力であり、その仏願力を信じて憶念称名する願生の因に呼応してはたらく増上縁を、仏願力と把えている。

この阿弥陀仏の本願力を増上縁として受けとるにはいかにすればよいのであろうか。曇鸞大師は『往生論註』卷上に八番からなる問答を設け、そのなかで『無量寿經』卷上に説く第十八願と、『観無量寿經』下品下生段に説くこと

るを比較して、「五逆誹謗正法」をなす者と「五逆十惡」をつくる者という往生にかかわる内容規定に相違のあることを指摘し、その解決にあたっていることは周知のとおりである。この問答をとおして曇鸞大師は、第十八願文の「乃至十念」の十念を、下下品所説の「令声不絶具足十念称南無無量寿仏」と受けとったことは、何ものにも代えがたい偉大な業績といわねばならない。つまり本願の十念は南無無量寿仏と声にだして十念具足する称念なのである。しかし声と念とについて法然上人が、(96)「声是念 念即是声 其意明矣」(『選択集』第三章私釈段)と言いきったように熟していない。すなわち曇鸞大師は

(97) 云レ念者不レ取ニ此時節ニ也。但言レ憶ニ念阿弥陀仏一。若総相若別相隨レ所ニ觀縁ニ心無ニ他想ニ十念相統名為ニ十念一。但称ニ名号一亦復如レ是。(『往生論註』卷上)

といっているように、念は憶念であり、声は下下品の説からするならば憶念できない者に対して、念の代行として示される名号を称えることである。つまり憶念するのは阿弥陀仏の総相、別相いづれにしてもその一一の相を觀縁しつつ憶念することであるから、かならずしも阿弥陀仏の名号を称えながら觀縁するのではない。

曇鸞大師は阿弥陀仏の名号について名体不離の考えを示して

(98) 問曰。名為法指。如ニ指指月。若称ニ仏名号一便得レ滿願者指月之指心ニ能破レ闇。若指月之指不レ能レ破レ闇。称ニ仏名号ニ亦何能滿願耶。

答曰。諸法万差不レ可ニ一概一。有ニ名即法 有ニ名異法。名即法者諸仏菩薩名号 般若波羅蜜及陀羅尼章句禁咒音辞等是也。(『往生論註』卷下)

といっている。この「名の法に即する」とは、まさに名体不離なることを示している。このような名体不離として把えられる仏名号の内容について

(39) 阿弥陀如来方便莊嚴真實清淨無量功德名号。(『往生論註』卷上)

と、規定している。このなか、「方便莊嚴」というのは阿弥陀仏の外用の功德を指し、「真實清淨」というのは、阿弥陀仏の自内証の功德を指している。このように理解するならば、阿弥陀仏の名号にはその仏の自内証と外用との双方の功德を具有していることが知られる。この名号観は

(40) 如来是実相身 是為物身。(『往生論註』卷下)

という曇鸞大師の仏身論に基づいていることはいうまでもない。そのことはともかくとして、この曇鸞大師の名号観は、

(41) 名号是万徳之所帰也。然則弥陀一仏所有四智三身十力四無畏等一切内証功德 相好光明說法利生等一切外用功德 皆悉攝在阿弥陀仏名号之中一故。名号功德最為勝也。(『選択集』第三章私釈段)

という法然上人の名号観のさきがけをなすといっても過言ではない。ただし、法然上人は名号に勝・易の二義を見出したが、曇鸞大師は名号の勝義を打ちたたてたが、易義を十分に実のらせていない。とはいっても、天親菩薩が阿弥陀仏によるすべての衆生を救済する本願の聖意を、人間に向って近づけ示した三種莊嚴功德成就相よりも、なお一層人間に近づけて示したのが曇鸞大師の名号観である、といつてよいであらう。

なお、第十八願文の「乃至十念」について曇鸞大師は、ただ十念を下下品の経説を踏えて把えたが、「乃至」について言及することがなかったが、ようやく道綽禪師に至つて、「乃至」を含めて十念を把えるにいたつた。すなわち『安楽集』巻下の第七大門において、娑婆と浄土に於ける「此彼の修道に功を用いる軽重、報いを獲る真偽をあかす」なかで、『無量寿経』巻下の「横截五惡趣自然閉昇道無窟」の文を解釈した直後に

(42) 若能作意廻願向西 上尽三形下至三十念 無不皆往。一到彼国即入正定聚。与此修道一万劫齐功也。

と指摘するにいたった。つまり「乃至」を「従多向少」の義として解釈したのは、道綽禪師をもって敲矢としなければならぬ。善導大師の「乃至十念」の妙釈は、師匠道綽禪師が示された妙釈を継承されたといつて過言ではない。

五、仏・凡の人格的な呼応関係

阿弥陀仏の浄土は、(2)にみられるように、惑業苦に苛まれる人間に、畢竟安樂大清浄の処を得せしめる世界であり、また、(2)にみられるように、願生者の一切の悪を止める世界であり、往生人の身口意三業の悪と二乗を求める心とを自然に止める世界である。つまり浄土に具わるはたらきは、すべて救わるべき衆生にかかわる清浄化といふべきであろう。もとより浄土の主は仏であるから、浄土に具わる清浄化のはたらきは、仏自身の慈悲・本願に基づくといつてよい。しからば阿弥陀仏の慈悲・本願は、一人ひとりの人間にかかわるのであるか。(2)の三止義の第二義には、「もし人また、かの国に生ずれば自然に身口意の悪を止む」と指摘している点に注目するならば、阿弥陀仏は、人間のいかなる身口意の悪業を、いかに清浄化するかを問わなければならない。このことについて、『往生論註』巻下に示される仏莊嚴功德成就偈の第二、三、四偈の釈に注目したい。長文ではあるが全文を掲げることにする。

(4) 凡夫衆生以_レ身口意三業造_レ罪輪三_レ界無_レ有_レ宿已。是故諸仏菩薩莊_レ嚴身口意三業二用治_レ衆生虚誑三業一也。云何用治_レ衆生。以_レ身見_レ故受_レ三塗身、卑賤身、醜陋身、八難身、流轉身。如_レ是等衆生見_レ阿弥陀如来相好光明身_レ者、如_レ上種種身業繫縛皆得_レ解脱入_レ如来家_レ畢竟得_レ平等身業一。

衆生以_レ憍慢_レ故誹_レ謗正法_レ毀_レ些聖賢_レ捐_レ三庫尊長_レ。尊者君_レ父師也、長者_レ如_レ是之人_レ応_レ受_レ拔舌苦、瘡痂苦、言教不行苦、無名聞苦。如_レ是等種種諸苦衆生聞_レ阿弥陀如来至徳名号、説法音声一。如_レ上種種口業繫縛皆得_レ解脱入_レ如来

家一畢竟得三平等口業。

衆生以三邪見二故心生三分別。若有若無 若非若是 若好若醜 若善若惡、若彼若此 有ニ如レ是等種種分別。以三分別二故長論三有ニ受ニ種種分別苦、取捨苦、一長寝ニ大夜ニ無有ニ出期。是衆生若遇阿弥陀如来平等光照。一若聞ニ阿弥陀如来平等意業。一 是等衆生如レ上種種意業繫縛皆得ニ解脱、入ニ如来家ニ畢竟得三平等意業。

このように、人間がみづからの身口意の三業の上にあらわす身見、憍慢、分別のはたらきに対して、阿弥陀仏は相好光明身という身業、至徳の名号・説法音声という口業、平等光照・平等撰取という意業をもって、これらの繫縛から解脱せしめ如来の家に入らしめるというのである。卷上における該当箇所の釈と関連させて理解するならば、阿弥陀仏の身業は凡夫人の心に出世間無漏の諸法を生ぜしめ、口業は無生法忍を得せしめ、意業は無分別の心を得せしめることが知られる。ともかく、阿弥陀仏がみづからの身口意の三業を莊嚴されるのは、一つかかって人間にそなわる身口意三業の汚染を除くためである、といって過言ではない。このことは、阿弥陀仏のはたらきは身口意の三業をもつて人格的な対応をおして行われることを意味する。

この阿弥陀仏の上に認められる人格的対応は、善導大師によってさらに仏凡の人格的呼応關係に展開することになる。すなわち『觀經疏』定善義の第九真身觀文の妙釈のなかに

(4) 問曰。備修ニ衆行ニ但能廻向皆得ニ往生。何以仏光普照唯撰ニ念仏者ニ有ニ何意也。

答曰。此有三義。一明ニ親縁。衆生起レ行口常称レ仏仏即聞レ之。身常礼ニ敬仏ニ仏即見レ之。心常念レ仏仏即知レ之。衆生憶ニ念仏ニ者仏亦憶ニ念衆生。彼此三業不ニ相捨離。故名ニ親縁也。

二明ニ近縁。衆生願レ見レ仏仏即応レ念現在ニ目前。故名ニ近縁也。三明ニ増上縁。衆生称念即除ニ多劫罪。命欲レ終時仏与ニ聖衆ニ自来迎接。諸邪業繫無ニ能礙者。故名ニ増上縁。

と、三縁義を述べている。このなか第一の親縁は、凡夫人が身口意の三業の上に称名、礼敬、念仏、憶念すれば、阿彌陀仏はこれを見、聞、知されるから、仏凡の三業が一にかさなりあって、離捨することがないのである。また第二の近縁は、阿彌陀仏を見たてまつりたいという願いをもって念称すれば、その念称に應じて阿彌陀仏はその人の目前に現在し給い、さらに第三の増上縁は、命終の時に称念すれば阿彌陀仏は聖衆と共にその人の前に来り迎接し給うから、境界愛、自体愛、当生愛といった愛など、あらゆる繋業の障礙なく往生の素懷を遂げることができるのである。これら三義は共通して、願生者の称念という呼びかけに應じて、阿彌陀仏は見聞知され、あるいはその総身を現じ、あるいは迎接し給うのである。つまり凡夫人の呼びかけを前提し、その呼びかけに應じる阿彌陀仏のはたらきを明確にしている。しかしよく考えるならば

(45) 無量寿経云。法蔵比丘在_三世饒王仏所_二行_三菩薩道時。発四十八願_二一願言。若我得_レ仏十方衆生称_三我名号_一願_レ生_三我国_二下至_三十念_一若不_レ生者不_レ取_三正覚_一。今既成仏即是酬因之身也。(『観経疏』玄義分)

と善導大師が指摘しているように、「わが名号を称」えよとは、阿彌陀仏が一切の衆生に対しての呼びかけであり、その呼びかけに應じて願生者は南無阿彌陀仏と称えるのである。したがって三縁義にみられる仏凡の呼応関係は、この四十八願釈にみられる仏凡の呼応関係を前提としているわけである。救い主阿彌陀仏と願生者である凡夫人の間には、称名念仏をとおして仏を基点とする人格的呼応関係と、願生者を起点とする人格的呼応関係のあることを認めなければならぬ。法然上人は『御誓言の書』といわれる『一枚起請文』を、「たゞ一向に念仏すべし」と結んでいる。いうところの称名念仏信仰の内実は、このような仏凡二重の人格的呼応関係の上に見出されるのである。

短時間ではあったが、曇鸞大師の浄土教思想をベースとしながら、浄土教思想信仰の特徴を人間観との係わりにおいて、日ごろ考えている一端を述べさせて頂きました。お粗末なことで申し訳ありません。ご静聴ありがとうございます。

ました。

〔追記〕

当日会場でお配りした資料に、さらに追加して論旨を明確にすることに努めました。

